

## 「父の笑顔」

私の父は、明るくユーモアがあり、人に優しく、よく笑う人でした。



そんな父が事故にあいました。一命を取り留めましたが、首から下を自由に動かせなくなりました。

普段、温和な父が入院してから、医師や看護師に対して、怒りをぶつけることが多くなりました。「もう何もしたくない。誰とも会いたくない。」と社会や人を拒絶していました。

家族で父の病室に行くと、父は眉間にしわを寄せて言葉を交わそうともしません。それでも母は、最近の出来事を話したり、家で飼っている犬や猫の話をしたりします。私は、とにかく毎日父のそばにいて話しかけました。

そのような状態がしばらく続きましたが、医師や看護師、理学療法士の方々が、根気よく励ましてくれました。ただ、けがをした直後のリハビリは激痛を伴うようでした。あまりの痛さで「勝手に動かすな」と怒る父に、「一度に動くようにはならないですよ。でも毎日コツコツと続けていくことが大切ですよ。」と、粘り強く訓練を続けてくれました。病院の方々の熱意に押された父に変化が始め、少しずつリハビリに取り組みようになりました。そのおかげで、自分で肘を曲げたり、肩を上げたりと、できることが増えていき、父の表情も明るくなっていきました。「毎日頑張る姿を見て、こちらも元気をもらっていますよ。」と声をかけられるなど、父の前向きな姿が周りを元気にしていく様子も見られるようになりました。

しばらくして、「もっと頑張れば、家に帰れるかなあ。」と父が言いました。それは生きる望みを無くしつつあった父が、みんなに支えられ、生きる力を取り戻したからこそ、発せられた言葉でした。

事故から二年が過ぎ、ようやく父が自宅へ帰れる日がきました。その頃には父の温和な笑顔が戻っていました。退院する時に、病院の方々が自分のことのように喜んでくれました。単なる仕事としての関わりではない、温かな心のつながりを私は感じました。

父がけがをする前の生活に戻ることはありません。しかし、家で家族と犬と猫に囲まれて暮らす父は幸せそうに見えます。車いすを押しして散歩に出かけた時、ふっと父がつぶやきました。「よく毎日病室に来てくれたよなあ。みんなありがとうなあ。」父にとっては母が支えとなり、母は父を支えたいと思ひ、その父と母を支えたのは、家族であり、病院の方々でした。

一緒に苦しみや喜びを共有できる人がそばにいてくれて、しんどい時の励みとなり生きる力となる、そういった人々のつながりに、私は改めて感謝しました。

問合せ先

人権教育課

☎077-528-4592

◆過去のシリーズ人権教育は、

こちらをご覧ください。

